

あいさつ

B・R・ナンダ

高橋正伸 訳

「ガンジー主義と仏教」と題するこの日印シンポジウムに参加できますことは、私にとって最大の光栄であります。

本日は、ガンジーの仏教観について話をさせていただきます。ガンジーの仏教観については、次の二つのことが言えます。一つは、ガンジーの宗教観とはどのようなものだったのかということ。もう一つは、ガンジーの仏教観とは如何なるものであったのかということです。第一の問題を理解しなければ、第二の問題を理解することはできないでしょう。

人に勧められて読みました。同じくエドウィン・アーノルド卿によるブッダの生涯、出家、教えについて書かれた別の本『アジアの光』も読みました。これらの本は奥深くで彼を覚醒させたのです。エドウィン・アーノルド卿によるこれら二冊の本は、生涯にわたりガンジーの宝となりました。また、友人に聖書について紹介されたのも、イギリスにおいてでした。

さて、宗教に対するガンジーの関心はイギリスで呼び覚まされたのですが、その関心は次第に消え失せていきました。ところが、偶然とも言えるべき素晴らしい出来事が起こります。一八九三年に法律関係の仕事で南アフリカにいったときのことです。

プレトリア(トランスヴァールの州都)でガンジーは、何人かのキリスト教宣教師と出会いました。ある宣教師は彼に、「人生の目的は、他の宗教の信仰者がキリスト教を受け入れるように説き勧めることである」と言いました。しかし、若い時から懐疑的な傾向をもっていったガンジーは、友人に次のように語っています。「私は、決心をする前に、ヒンズー教や他の宗教について

一 ガンジーの宗教観

よく知られているように、ガンジーが最初に宗教の手ほどきを受けたのはロンドン滞在中のことでした。十八歳の学生であったガンジーは、神智学者(セオソフィスト)の友人に、生地の宗教について全く無知であることを告白しました。自分が生まれた土地の言葉、グジャラート語で書かれた『ギーター』すら読んだことがなかったのです。ガンジーは、エドウィン・アーノルド卿による『ギーター』の訳詩『天来の歌』を、友

研究し、理解しなければならない」と。ガンジーが行ったこの研究は、私たちが比較宗教学と呼んでいるものでした。彼は、キリスト教やイスラム教、ヒンズー教について書かれている著作を研究し、同じ師のもとに学ぶ友人たちと交流しました。当時南アフリカには、ヒンズー教について書かれた本があまり多くありませんでしたので、ガンジーは、学識ある人々と手紙の交換をしました。その一人が、後に彼の師匠となる学者ラージ・チャンドラ・ジェインでした。

神学の書物を拾い読み、識者たちと交流したり手紙のやり取りをしたことを通じて、ガンジーは次のような結論にいたりました。すなわち、真の宗教というのは、知識ではなく心の問題である。そして、文字通り生きているものである。このことを理解している人々はほんの一握りでした。しかしガンジーのこの発言と実践は、人々のなかに彼に対する誤解を生じさせました。ある人々はガンジーをサナータニスト、伝統派ヒンズー教徒と呼びました。またある人々は仏教徒、神智学者と呼び、他の人々はキリスト教徒と呼びまし

た。私が言いたいのは、ガンジーがこれら全てにあてはまると同時に、それ以上のものだということです。彼は、教義と形式の衝突の根底にある、根本的な同一性を見たのです。

私は、ガンジーはヒンズー教の歴史における偉大な革新者であり改革者であると見ています。彼は明らかに、合理的かつ懐疑的な傾向をもっていました。その傾向はヒンズー教に根ざしたものではありませんでしたが、深く人間主義的かつ全世界的な性質をもった宗教哲学の形成を、ガンジーに可能にさせたのです。

たとえ聖典であっても、時間と空間を超えた唯一の解釈を限定できるものではないとガンジーは言っています。偉大な著作の意味するところは更新されていくのです。あらゆる生きた信仰は、それ自体のなかに自らを活気づける力をもたなければなりません。あらゆる宗教のあらゆる信仰形式は、辛辣な理性の検証を受けなければなりません。結果的に不正もしくは非人間的な行為になるならば、聖典による道徳的拘束は無効なのです。ガンジーはヒンズー教に、この辛辣な検証

をためらいもなく適用しました。

二 ガンジーの仏教観

ここで、ガンジーの仏教観について若干述べてみたいと思います。彼は、「私は限界を知っています。学問、とりわけ仏教の法についてはその学識に任ずることはありません」と言っています。先ほども申しましたように、ガンジーはブッダの生涯についてのエドウィン・アーノルド卿の著作に興味をもちました。彼は一九二五年に、アーノルド卿の著作に初めて出会ったことから、多大な影響を受けたと告白しています。

インテリたちはブッダの教えについて語りました。しかし、民衆は哲学者ではありませんでした。彼らは解釈書を書きませんでしたし、重箱の隅をつつくような議論にはこだわらなかった。彼らは行動する哲学者だったのです。ガンジーは、「私は、民衆のなかで生きる民衆の一人です。仏教は、民衆のために修行を減らしたヒンズー教に他なりません」と言っています。更に、「ブッダはヒンズー教を拒絶したわけではなくあ

りません。その基盤を抜けたのです」とも言っています。ガンジーはヒンズー教に新たな魂、新たな解釈を与えたのです。仏教の名で通ったものはインドから消えてしまいました。ブッダの生涯と教えはインドから消えてはいないのです。

私は自分の限界を知っておりますし、非常に学識のある僧侶や同じく優秀な在家の方々の前で話しているということを理解していますので、寛大さをもって聞いていただきたいのですが、あえて皆様の前で言わせていただくならば、ブッダの教えは、セイロン、ビルマ、中国、チベット、あるいはその他の国々に伝わったとき、十分にその地に同化しませんでした。仏教が伝播した諸国では、アヒンサー（不殺生）の思想が動物の生命にまで及んでいなかったのです。実際ブッダは、この宇宙には、永遠かつ普遍的に道徳的支配が存在していることを強く主張しました。ガンジーは、この道徳的支配こそが神そのものであると言っています。

また涅槃（ニルヴァーナ）についてガンジーは、『涅槃』とは、決して存在の完全な消滅を意味するもので

はない。ブッダの生涯の中心的事実を私が理解できた限りにおいては、我々の内にある悪意あるものすべて、墮落しやすいものすべての完全なる消滅が、『涅槃』なのである。『涅槃』とは、死の暗くて生気のない平安ではなく、生きた平安、生きた魂の幸福なのである」と語っています。

彼にとつての宗教の意味するところを要約すると、次のようになります。一つは、「宗教は如何なる形においても憎悪と暴力を許してはならない、寛容の普遍的宗教である」ということ。もう一つは、「宗教はすべての人にアヒンサーを説くものであり、宗派を意味するものではない。宇宙を道徳的に支配することへの信念である」ということです。ヒンズー教、イスラム教、キリスト教という区別を超えたものが宗教である。ドグマ、儀式、組織化された宗教、迷信などを超えたところに、ガンジーにとつての宗教が息づいていました。実際、彼にとつての宗教とは、非暴力に基づいた日常生活のための倫理だったのです。

三 むすび

今回のセミナーは、国立ガンジー博物館と東洋哲学研究所の共催によるものです。池田SGI会長の著作のなかに、私たちはガンジーの思想の役割と、現代世界における重要性を見出すことができます。池田会長は、毎年平和提言を出され、世界の状況を考察され、仏教哲学に則って諸問題に対する実践的活動に示唆を与えておられます。これこそが、ガンジーが心から支持したであろう目的なのです。池田会長は、人種、国家、民族、宗教の壁を取り払おうとされています。それらは、ガンジーの思想と響き合う運動の一部をなしています。この運動は、国家間の対話、貧困撲滅、軍縮への進歩、環境破壊から地球を守るための調和された努力を強調しています。これらすべてが、相違点もあるガンジーとブッダを統合させたのです。これらは仏教のカギ、ヒンズー教のカギであり、過去現在にわたる人類にとってのガンジー主義のアジェンダなのです。現代世界において、「勇気」こそが平和と調和をも

たらす力です。もしこれが宗教の解釈であり、ガンジーの解釈であり、仏教の解釈であるとすれば、今回のセミナーほど意義深く実りあるセミナーはないと言えるでしょう。

(B・R・ナンダ／国立ガンジー博物館議長)

(訳・たかはし まさのぶ／創価池田女子大学)

教育アドバイザー)